

第51回 日本美術教育研究発表会2017

The 51st Annual Conference of InSEA in Japan 2017

研究発表概要集

InSEA



期 日 2017（平成 29）年10月15日（日）

会 場 東京家政大学 板橋キャンパス16号館
[〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1]

主 催 公益社団法人 日本美術教育連合
INTERNATIONAL SOCIETY FOR EDUCATION THROUGH ART IN JAPAN

第51回 日本美術教育研究発表会2017

昨年度の第50回記念日本美術教育研究発表会2016には、研究発表申込みが35組ありました。本年度は14組増で史上最多49組の申込みがあり、発表会場を増やし5会場同時発表とします。閉会式後に、16号館1階のカフェラウンジ「ルーチェ」で懇親会を催し、最初に集合写真撮影を行います。国内外の最少参加費で、学的研究・授業実践など多彩な研究発表会にぜひご参加ください。

-

- [illegible]

- 問合せ先： **【事前・事後】** 山口喜雄^{のぶお}
(研究局長)
nobuoya@cc.utsunomiya-u.ac.jp

- 緊急連絡： [当日のみ] 東京家政大学 結城孝雄（事務局長）携帯電話 090-2387-6094

日本美術教育研究発表会2017 懇親会

- ☐開催日時： 2017年 10月15日（日）（閉会式後） 16時30分～ 18時20分
☐会 場： 東京家政大学 板橋キャンパス16号館 1階カフェラウンジ ルーチェ
☐会 費： 一般 2,500円、現職教員を除く院生・学生2,000円（昨年参加者数63名）
☐参加申込： 当日午前中に受付にて承ります。懇親会のための参加は山口宛てメールも可。
☐持寄歓迎： ワイン・清酒・洋酒のご持参を歓迎します。（記名され受付にお渡し下さい）

A1 ●STEAM教育にみる異領域同士の融合原理（I）

－関連文献から考察する“Art”の位置付け－

Integration Principle between Different Areas in STEAM Education (I) :

Positioning of “Art” to consider from related literature

畑山 未央 (Mio HATAYAMA)

東京家政大学 Tokyo Kasei university

東京学芸大学大学院博士課程 Tokyo Gakugei University Doctoral Candidate on Art Education

「予測が困難な社会」の中で、それでも教育は子供達が活躍する将来へ見通しを持って対応しなければならない。この状況下で、物事を文脈的に判断し、目の前の課題に多角的に挑戦できる力等は、我国だけでなく諸外国でも重視されているスキルである。それらスキルを我国の学校教育で育むために、各教科等の学習を基盤としながら、教科等の枠を越えて知識を相互関連的に捉え活用していく学習場面の創出が目指されている。美術科教育においても、教科固有の学力を捉え直しつつ教科横断的な視点で授業をデザインしていくことは、子供達が学校での学びを実社会に結びつけていけるための手立てのひとつとして有効であると考えられる。

美術科教育と他教科の関係を考えるにあたり、米国にて推進されているSTEAM教育に着目した。STEAM教育は、芸術系教科がもつ学習意欲や創造性を高める教科特性に注目し、理数系教科に芸術内容を取り込む融合教育として構想されたものである。そこで目指されるのは単に科学教育の効果的な発展だけでなく、創造性を伴った全人的（Life-long Holistic）な教育であるとされている。

本研究は、STEAM教育を我国において推進していこうとするものではない。むしろある面では批判的に捉えつつ、融合教育における「“Art”の位置付け」の考察を「質的に異なる領域をつなぐ原理」の追究へと発展させながら、我国の美術科教育への多面的な示唆を得ようとするものである。本発表は、その萌芽的内容である。

A2 ●日本の国際協力における基礎教育分野の一考察

－造形美術教育の技術移転に関する質的分析－

A Study of Basic Education in the Field of Japanese International Cooperation :

Qualitative Analysis of Technology Transfer in the Art Education

山田 猛 (Takeshi YAMADA)

東京学芸大学附属竹早中学校 Takehaya Junior High School Attached to Tokyo Gakugei University

日本の国際協力における造形美術教育への取組は、半世紀に及ぶ実績にも関わらず、その事例研究は極めて少ない。基礎教育分野への取組は、その現場で活動する国際ボランティアの報告書と聞き取り調査を基に、技術移転達成の可否に分析視点を設定し、その可否を分ける要因や、技術移転に繋がる為の様々な要因を質的分析することにより検証する。本論における技術移転とは、派遣国配属先等における教員による、ボランティアに頼らない造形美術教育の実践がそれに当たる。

分析手法として、記述や回答のセグメント化、その概念化、概念的カテゴリー抽出し概念間の関係性を多角的に検証・考察、それを基に一般化した概念モデルの再構築をした。その結果、技術移転可に繋がる為、活動中のボランティア自身の変化が、技術移転可否を分ける重要な要因となることが明らかとなった。現場の実態や課題・問題点等を明らかにしつつ、概念的カテゴリーを分析し、技術移転に繋がる関係性を再構築、その典型モデルを構造的に示すことは、国際協力・造形美術教育現場へのフィードバックにとって有効であると考えられる。

A3 ●美術教育における汎用的資質・能力の育成に関する一考察

－省察的学習の事例から－

A Study of Fostering Generic Skills in Art Education :

Through a process of reflection

守屋 建 (Takeru MORIYA)

東京学芸大学附属小金井小学校 Koganei Elementary School Attached to Tokyo Gakugei University

本研究は図画工作科の授業における汎用的資質能力を育成するための実践によるカリキュラム・マネジメント研究である。美術科教育学会静岡大会（2017）「美術教育における汎用的資質・能力の育成に関する一考察－造形遊びでの実践を通して－」での研究を踏まえ、共同製作や造形遊びの活動における造形要素がメディアとして機能し能動

的に学び合いを促していく場面の動画記録や、友達との対話を含めた協働的ふりかえり、活動後の個人の学習感想（ふりかえり）を年間通じて記録し、そこから考察をしている。

本研究の目的は、コンピテンシー・ユース（能力活用型）となる造形活動特有の学びの姿から、図画工作科における本質的な学びと同時に、他教科へ横断する汎用的資質能力の学びを明確化し、教科の本質をおさえた有機的なカリキュラムの在り方を考えていくことである。本実践研究の結果、図画工作科だからできる言語活動など、学びの場面を整理していくことができた。また、年間を通じて子供の学習感想を記録することによる省察的学習の研究から、学習者である子供のメタ認知能力の育成である他、授業者である教師自身の授業改善にもつながるカリキュラム・マネジメントが行われたという結果も得られた。

A 4 ●21世紀美術科教育教員養成の研究（1）

－松原郁二・倉田三郎・熊本高工の美術教育論－

Study on Art Teachers' Training in the 21st Century (1) :

Art Education Theories of Ikuji Matsubara, Saburo Kurata and Takanori Kumamoto

山口 喜雄 (Nobuo YAMAGUCHI)

元 宇都宮大学 Former Professor, Utsunomiya University

本研究は、21世紀の教員養成における美術科教育の授業実践研究の一環として行い、50代後半～60年代における松原郁二（1902-77）・倉田三郎（1902-92）・熊本高工（1918-2008）がとらえた美術教育論を考察する。

筆者は20世紀後半の日本美術教科書研究を1998年から継続し、日本美術教育連合刊『日本美術教育研究論集（2003年以前は紀要）』に2000年度から18年間連続掲載された。標記の主題で副題を略し1）～10）は題材を分野毎に、以後はそれらに基づいて学校教育課題を横断的に再検討し、副題のコアを11）平和2010、12）民主主義2011、13）伝統文化2012、14）情報化2013、15）高齢化2014、16）国際化2015、17）適応2016、18）総括2017など多角的に論考を展開した。教科書研究を通して全容を整理した知見も、現代の美術科教育教員養成の研究に援用する。

なお、本発表には美術科教育学会静岡大会（2017/03/28）での「21世紀美術科教育の先達・松原郁二の美術科教育論」、および大学美術教育学会広島大会（2017/09/23）での「倉田三郎・熊本高工がとらえた図画工作科の課題」の口頭研究発表の成果も反映させる。また、21世紀の教員養成の始原は1950年代後半から60年代にあると考え、当時をリードした三氏の代表的な著作を検討する。ちなみに、東京教育大学教授の松原著『美術教育法』（1969年、誠文堂新光社）、1965年INSEA東京会議会長で東京学芸大学教授の倉田と同事務総長の熊本による共著『図画工作科99の相談』（1957年、明治図書）を軸として考察する。

A 5 ●1950-70年代のアメリカにおける美術教育評価論に関する一考察

A Consideration about the Theory of Evaluation of American Art Education in 1950-70's

佐藤絵里子 (Eriko SATO)

元 筑波大学大学院博士課程 University of Tsukuba, Doctoral Program; ex-graduate student

本研究の目的は、1950-70年代のアメリカにおける美術教育評価論というテーマに基づき、主流となった理論的動向を時代区分ごとに整理し、それらの特徴を文献調査によって明らかにすることである。その際、美術を通して伸長すべき、教育的価値の構造化という観点を採用し、研究史上の出来事の流れに沿って、個々の理論の内部で当該の観点到影響を及ぼした思想的側面に対する接近を試みる。このような試みを通して、筆者は、1950-70年代のアメリカで隆盛した動向から現代の動向までを含めた、美術教育評価論の全体像を俯瞰し、個々の理論を相対化するための視座を獲得することを目指す立場をとる。

具体的に述べると、本研究は、1950-70年代におけるアメリカ美術教育史を、三つの時代区分によって把握することを前提としており、それらは各々、創造性に関する科学的リサーチ（1950-60年代を中心とする動向）、美術教育における行動目標論（1960年前後を中心とする動向）、質的探求（1960-70年代を中心とする動向）によって特徴づけられる。三動向は、当時の情勢の影響を受けつつ、芸術教育とは何かという問いに対峙するための多様な応答を生み出す母体となった。評価表、タキシノミー、マトリックス、ループリック等の名称に代表される美術の教育的価値の構造物は、アメリカのNCCASによる2014年の『ナショナル・コア・アーツ・スタンダーズ（National Core Arts Standards）』を筆頭とする多くの文献の中で、現在まで生産され続けている。

A 6 ●中学校美術科と国語科の教科融合型学習の研究

ー地域の鉱物から顔料を作り、色名を考える事例からー

Art and Language Integrated Learning in a Junior High School: An example of naming colours by making pigments from regional materials

藤井 康子 (Yasuko FUJII)

大分大学 Oita University

木村 典之 (Noriyuki KIMURA)

大分県立美術館／大分県教育委員会

Oita Prefectural Art Museum / Oita Prefecture Board of Education

永松 芳恵 (Yoshie NAGAMATSU)

津久見市立第一中学校 Tsukumi Daiichi Junior High School

本研究は、大分県津久見市内の中学校2年生91名を対象に、美術科と国語科を中心とする教科融合型学習プログラムを大分大学と大分県立美術館、津久見市教育委員会の連携により開発する試みである。美術科と国語科の教科特性が効果的に融合した学習モデルを開発する。地域の網代島には、深海で形成されチャート(chert)が海上に露出している場所があり、酸素量や形成過程によって赤や赤紫、黒、白、薄黄、薄緑など多様な色調が見られる。これらを故郷の色と捉え、顔料づくりや色名を考える等の取り組みを行い、最終的には『津久見色辞典』の制作につなげていく。生徒一人ひとりが協力して『津久見色辞典』を作り上げるプロセスを通して、地域の歴史・文化の成り立ちや日本の伝統色についての理解も深め、故郷の魅力と課題を発見し、地域の魅力を主体的に発信する学習者を育てたい。

研究対象校の実態として、例えば美術科では、作品を細部まで観察して分析的に捉えることや、そこから得られた自分の解釈・美的価値観を組み立てる等の深い学びへの探究心を働かせる学習過程に課題がある。そこで、生徒に身近な生活の中に美しいもの(魅力)を発見する教科融合型の探究学習に取り組ませ、ものの見方や考え方を広げるとともに表現力を育んでいきたい。

なお、本研究は公益財団法人 博報児童教育振興会による第12回児童教育実践についての研究助成を受けている。

A 7 ●秋田&フィンランドの「視覚美術・工芸」教育交流展の実践報告(1)

ー両国中学校における相互交流展の実際から高等学校交流展の実施に向けてー

Practice Report of "Visual Arts / Crafts" Educational Exchange Exhibition in Akita & Finland (1):

Toward the implementation of high school exchange exhibitions based on actual exchange exhibitions at junior high schools in both countries

田中真二郎 (Sinjiro TANAKA)

秋田県大仙市立西仙北中学校 Daisen Prefectural Nishisenboku Junior High School

黒木 健 (Ken KUROKI)

秋田県立西目高等学校 Akita Prefectural Nishime High School

尾澤 勇 (Isamu OZAWA)

秋田公立美術大学 Akita University of Art

秋田県大仙市立西仙北中学校(美術科)教諭:田中真二郎、秋田県立西目高等学校(芸術科美術)教諭:黒木 健、秋田公立美術大学准教授:尾澤 勇の中・高・大の相互連携活動の一部として、フィンランドとの教育交流展事業実践研究の中間報告を行う。田中と黒木は以前より「美術の時間」展を企画し、生徒自身や保護者、地域に対して美術の時間で育まれる資質・能力を見える形で発信してきた。尾澤が2013年にエスポー市立中学校(視覚美術・情報)教諭と交わした学校間交流の企画を受けて、2014年度に田中に依頼し、両国生徒が交流を重ねてきた。その結果2015年度はエスポー市立中学校教諭と通訳を招き、「秋田公立美術大学アトリエももさだギャラリー」と「西仙北中学校内」での「美術の時間」展が実現した。2016年度は、田中と尾澤が訪芬し「クニンカーンティエ高等学校入口公共ロビー展示場」と「サールニラークソ中学校」で、共通テーマ制作による「美術の時間」展を開催することができた。2017年12月には、黒木と尾澤が訪芬し、両国の高等学校による「美術の時間」展の開催に向けて企画進行中である。この交流展事業を契機にそれぞれの文化の違いや共通性、自然や郷土の伝統文化のよさや美しさを実感をもって理解する貴重な機会になればと考え、今後も内容を相互で創意工夫して深化と広がりを図っていきたい。本実践は、(公財)野村財団の助成を受けている。

A 8 ●アイスランドとCity and Country Schoolの交流

The Interchange between Iceland and City and Country School

伊東 一誉 (Hanayo ITO)
東京学芸大学大学院連合学校博士課程

Tokyo Gakugei University doctoral candidate on art education

New York市のCity and Country School (C&C) は、美術教育を中心に独自のユニークなカリキュラムを開発している私立校である。中でも、Block Buildingという積み木の学習は、幼児教育として用いられながらも、7～13歳児の社会学習プログラムの中に取り入れられるなど、学問分野における視覚的アプローチの重要性を強調している。このC & CでBlock Buildingのコンサルタントとして、アイスランドの教育者たちと交流しているHarriet Cuffaroは、他国の学校教育の伝統を生かしながら、Block Buildingの効果を現場に落とし込むための試行錯誤を行っている。そこで共有されているテーマは「経験を展開させる教育」であり、「子どもにどのような経験の場を与えることが、創造性の育成につながるのか」という課題である。SNSの普及や学校現場におけるiPadの導入など、テクノロジーの急速な進化と変化に対し、New York市の保護者や教育者が高ストレスを抱えていること話題となる中で、C & CはBlock Buildingの実践に確かな方向性を見出しており、新たな環境に対応するためのプログラム開発に向かっている。

A 9 ●社会と関わる美術教育のあり方

—教師教育における再概念化—

A Study on Art Education Related to Society :

Focusing on reconceptualization in teacher education

柳 芝英 (Jiyeong RYU)

韓国春川教育大学校 Chuncheon National University of Education, SOUTH KOEA

本研究の目的は社会と関わる美術教育のあり方について、韓国における予備教師の個人的及び社会的アイデンティティと授業実践の事例から探ることである。特にソーシャリー・エンゲイジド・アートなど社会的活動を中心とする芸術教育に教師教育の改善のための提案をするものである。芸術教育におけるカリキュラムの構成が社会的環境と関連が深いということを認識するためには、教師教育の内容が重要である。この研究において将来の教師は、社会、芸術、教育は密接に相互関連していることを発見することができた。しかしながら社会との関わり方において美術教育の持つべき哲学的・反省的側面に至っていないことが課題として残されている。美術教育は個人の反省的立場から社会的アイデンティティを構築し、社会と関わる美術のあり方を探ること、そのアプローチの反省的側面によって将来の教師教育に貢献することが期待される。

A 10 ●国際美術教育学会誌に見る研究動向

A Review on the Recent Studies in the *International Journal of Education Through Art*

直江 俊雄 (Toshio NAOE)

筑波大学 University of Tsukuba

国際美術教育学会誌 (*International Journal of Education Through Art*) は、国際美術教育学会InSEA (International Society for Education Through Art) によって2004年に創刊され、年に3回発行されている英文の学術誌である。創刊時から編集委員として関わってきた経験をもとに、同誌における最近の研究動向に目を向けるとともに、論文投稿に関する情報を提供し、日本から海外へ一層の研究発信力を高めるための方途を共に探りたい。昨年度の発表では、2015年に刊行された第11巻を中心に、特に「制作に基づく研究」の研究動向に着目したが、今年度はそれ以降の展開に目を向ける。

B 1 ●児童の主体性を引き出す図画工作授業実践の研究（２）

－中学年の表現活動について－

Study of Classroom Practice to Bring out Children's Self Direction in Arts and Crafts (2) :

Middle grades in elementary school for Representation

矢澤 聡 (Satoshi YASAWA)

沖縄カトリック小学校 Okinawa Catholic Elementary School

本研究は、昨年度発表した「児童の主体性を引き出す図画工作授業実践の研究（１）－低学年の表現活動について－」の内容を継続し、図画工作科学習指導要領の内容、A表現（１）、（２）について中学年に焦点を当てたものである。

本研究でいう「主体性」は、小学校の授業の中で、今日のめあてやルールを理解した上で自分なりの表し方を模索しようとする姿勢や意欲のことである。

昨年度は、子どもが授業の中で見せる具体的な姿やつぶやきから、題材、ねらい、材料、発問など授業を構成する要素を組み立てることを中心に実際の授業実践を通して考察した。今年度は昨年提案した３つの観点、①いいこと考えた！（課題を前向きに捉え、発想を膨らませ、試そうとしている姿）②友達の工夫をヒントにやってみたよ！（同じ課題に取り組む友達の工夫を観察し、自分の活動の中に活かそうとする姿）③もっとよくするにはどうしたらいいかな？（自分のイメージに合わせて、目の前の作品を変化させようとする姿）のうち、課題となった③もっとよくするにはどうしたらいいかな？を中心にして、実際の授業の様子を交えて提案し、その成果と課題を考えたい。

B 2 ●中学校美術科の授業におけるコミュニケーションロボット活用の可能性

Possibility of Using Communication Robots in Art Education at Junior High School

茂木 克浩 (Katsuhiro MOGI)

群馬大学大学院 Gunma University Faculty of Education Graduate Student

／みどり市立笠懸南中学校 Kasakakeminami Junior High School, Midori City

筆者は、中学校３年生を対象に実践した『人DESIGN Project』と名付けた授業の中でコミュニケーションロボットを活用した。具体的には、美術の授業中に外部人材（クリエイター／ALS患者）と生徒が、アイディアについて話し合いをする場面で活用した。その実践の中で用いたロボットが『OriHime』である。このロボットは、本人の音声だけをただ伝えるだけでなく、文字入力による人工音声によって会話をおこなうことができる。また、ジェスチャーを用いることで操縦者の感情を表現することもできる。そのため既にこのロボットは、神経変性疾患によって発話や表情・仕草によって意志が伝えられなかったり、療養等の様々な理由により外部に出ることができなかったりする人などに社会参加ツールとして活用されている。本研究では、授業中にコミュニケーションロボットを通して外部人材とやり取りしたことが、生徒たちにどのように受け取られたのか、生徒にどのような変化を生んだのか、実践後におこなったアンケート等を元に考察する。また、その考察からコミュニケーションロボットの活用が子どもたちの学びをどのように充実させる可能性をもつのか検討をおこなう。

B 3 ●文化多様性の理解を目的とした色彩構成ワークショップの開発

B 4 Developing for Color Arrangement Workshop to Understand Cultural Diversity

手塚 千尋 (Chihiro TETSUKA)

東京福祉大学短期大学部 Tokyo University of Social Welfare Junior College

笠原 広一 (Koichi KASAHARA)

東京学芸大学 Tokyo Gakugei University

池田 吏志 (Satoshi IKEDA)

広島大学 Hiroshima University

佐藤 真帆 (Maho SATO)

千葉大学 Chiba University

茂木 一司 (Kazuji MOGI)

群馬大学 Gunma University

私たちはこれまでに、文化をテーマにした表現活動で引き出される学習者の“個人的な文化”による広義の異文化理解を目的としたワークショップの開発・実践を重ねてきた。これまでのワークショップでは、ステレオタイプ化された文化や国家のイメージが先行しない理解が促されたり、人間の社会的営みに共通性を見出そうとしたりするなどの成果が得られている。今回は、“個人的な文化”を軸とした異文化理解というコンセプトを継続しながら、文化的多様性の理解を促すことを目的に、個人とその背景にある文化・社会との関係性を描き出すための装置として「色」に着目した。

「色」が持つ文化的・社会的な意味やイメージは、生活する環境（自然、季節）、民族や宗教などによって多様である。一方で、染色技術の革新やグローバリゼーションは、色の選択に個人の嗜好性を許容した。したがって、現代における個人による「色」の選択は、文化・社会を背景とした個々の価値判断が伴う活動として解釈できることから、本研究では以下のようなワークショップを構想した。1)「日常」をテーマにした色の選択、2)色面構成、3)色の意味づけ、4)配色の命名、5)プレゼンテーション。

本発表では、①国内4カ所でのパイロットスタディの取り組みと、②InSEA2017大邱大会で実施したDiversity × Color Workshopの報告、③ミニworkshopを実施する。

B 5 ●ワークショップにおける関係性に関する実践研究II

－「場・人・モノ」の関係性に着目したプログラム開発のための仮設モデルの構築－

Practical Study about the Relationships of Workshop II :

Construction of the temporary model for program development that paid its attention to the relationship of “Place, Person, Thing”

前沢 知子 (Tomoko MAEZAWA)

横浜国立大学大学院研究生

YOKOHAMA National University Graduate School of Education Research Student

本研究は、発表者が地域や教育の現場において、ワークショップを多数実践してきた経験からの「ワークショップの有効性」への実感から始まった。

近年、ワークショップは様々な場所で頻繁に開催され内容も多様化されつつある。そのたその有効性も多岐に渡ると考えられる。しかし記録の蓄積の問題点や先行研究の不足により、参加者に何がもたらされているか不明な現状がある。そこで本論文では、ワークショップにおける関係性に変化が生じたことによって、参加者にもたらされる事象に着目する必要がある。

このように実践から浮上した課題である「ワークショップにおける関係性」について、ワークショップにおける構成要素に着目し「場・人・モノ」の関係性の変化について、実践研究と理論研究を往還して検討を行った。その検討は（1）ワークショップにおける関係性の変化で生起する要素を実践と理論で明らかにし、（2）それらが組み込まれたワークショップ・プログラム開発のためのモデル構築を行うものであった。仮説モデルは、過去の実践したプログラムの構成要素から分析し、その結果から構築した。その結果、ワークショップでは「場・人・モノ」の要素による要因が起点となり、既存の「関係性」にズレを生じさせ、それを解体させ、再構築が起こることがわかった。

B 6 ●絵画の共同制作における場の作り方

Way of Making a Place in Collaboration of a Painting

藤原 秀博 (Hidehiro FUJIWARA)

館林市立第一小学校 Tatebayashi Municipal Dai-ichi Elementary School

近年、日本ではアートプロジェクト・アートイベントが各地に広がり、参加型の作品制作や共同を重視したワークショップが頻繁に行われるようになった。筆者の住む群馬県においても、大学などの外部組織と連携した教育活動や、新しい美術館での教育普及によって、親子で参加型の美術・アートに親しむことが浸透してきた。しかし、このような社会の変化があるにも関わらず、学校では昔と変わらない授業形式を行っていることが多い。

社会の変化を受けて、図工・美術の指導要領では共同してつくりだす活動を取り上げるよう明記されている。それにも関わらず、実際の授業では、個の表現能力を高める個別学習の形式になってしまいがちである。その理由として、準備する教師の負担が大きいことや、教師自身共同制作の経験がないため、どう進めてよいかわからない不安があることが挙げられる。特に絵画の共同制作においては、参加者が多いほど活動が拡散していきまとめることが難しい。しかし、このまま昔と変わらず個別の形式のみで授業を行うことが、美術を愛好する心情や美術文化についての理解を深めることにつながるのだろうか。学校の中の図工・美術と社会で体験する美術・アートのずれに一番違和感を抱くのは、子どもたち自身ではないか。

そこで、筆者は今まで体験してきたアートプロジェクトやワークショップの経験・手法を生かし、夏休みの課外授業の時間で絵画の共同制作の実践を試みた。

B 7 ●地域の伝統文化を学ぶ教材のあり方を探る

ー夢獅子を題材とした経験的な学修を中心にー

Search of the Teaching Materials to Learn Local Traditional Culture in Art Education :

Focusing on Development and the Practice of the Empirical Learning Process that utilized "YUMEJISHI"

赤木 恭子 (Kyoko AKAKI)

熊本大学 Kumamoto University

本研究は、美術科教育において、地域の伝統文化を学ぶ造形教材を踏まえた学修のあり方を追究するものである。本発表ではその一環として、熊本大学教育学部における「図画工作」の授業について考察する。本発表で示す「夢獅子」は、熊本市立一新小学校と本研究者が行った「連携活動に基づく題材」である。その中で実践事例として示す主な教材は、熊本大学に近い藤崎八幡宮の例大祭で奉納される新町の獅子舞の獅子頭を小型化し、角に児童の夢を象った「一新の夢獅子」である。（一新小 東 奈美子教諭〔当時〕の実践に依る）本課程ではまず、切り絵、影絵、和紙染色などによる平面と立体の構成を主として造形的なイメージから情感を表すことや、作品が内包する風景や語りを読み取り、具体化することなどを教材製作の基礎として行った。その後、本題材により、夢獅子（熊大夢紋版）を製作した。獅子頭の鑑賞、作者による新町の歴史や獅子作りの講話と指導、先の東教諭からは教材開発に関する助言も行われた。学生達は一連の学びの中で、和紙による本物の獅子型の迫力や質感、伝統の技の魅力に触れ、地域に根ざす伝統文化を実感し、自らの夢の形として昇華させる「教材」に向き合っていた。本発表では以上を踏まえ、造形によるイメージの位相から社会化し、地域や暮らしに対する意味生成の場が経験的な領域へ向かう図画工作科の教材のあり方とその学修プロセスについて検討したいと考える。

B 8 ●現象学的視点からの造形活動分析による学習者の学びの理解をめざして

Understanding of Students Learning though Art Works from Phenomenological Perspective and Reflective practice

小田 恵子 (Keiko ODA)

神戸市外国語大学大学院／神戸市立港島学園小学部

Kobe City Municipal Minatojima Gakuen Elementary School/Kobe City University of Foreign Studies

小学校現場には様々な児童が存在する。教師は児童の実態を把握した上で授業計画を行う必要があるが、既存の題材を安易に使用したり、一人一人の学びのプロセスを見とる意識が低いという現状がある。図画工作科においては、「作品」という目に見える形での学習の成果があるが故、その傾向が強いのではないと思われる。

筆者は、こういった教師の児童理解や教材理解に関する課題解決を目指した教育の在り方を見出すことを研究課題としている。このことについて、図画工作科における授業の省察を工夫することで、児童理解に関する一定の成果は見られたが、根本的な解決には至らなかった。そこで、基礎となる理論の検討を行った結果、現象学的アプローチを援用することにした。現象学は、日常の経験の本質や意味をより深く理解することを目的とし、経験の中にとどまり、

それを内側から切り開いていく思考である。それによって、筆者の図画工作科の授業を受けた小学生の活動や作品を分析し、児童がどのような学びを経験したのかを理解しようと試みた。

結果、「児童と教師の教材理解が異なっている、児童はその子なりの学習プロセスに沿って学習活動している」ことがわかった。また、今後の課題として、「その子なりの学習プロセス」に合わせた有効なアプローチを検討することとした。

B 9 ●ESDの視点からみた造形教育の実践

ー東日本大震災で被災した宮野森小学校の場合ー

Think about Arts Education by ESD :

6 years of educational activities in Miyanomori elementary school affected by the Great East Japan Earthquake

宮崎 敏明 (Toshiaki MIYAZAKI)

東松島市立宮野森小学校 Miyanomori Elementary School

東日本大震災から6年が過ぎた。被災校となった本小学校においては、教育活動にさまざまな課題が生じ、中でも子どもたちのPTSDの症状は深刻な状況にあった。このような環境にあって、課題解決に有効な造形教育は何なのかと模索しながら実践を重ねてきた。震災から6年間を経て、瓦礫が覆っていた地域は復旧し、復興に向かって人や物が一步一步進んでいった。この変化の激しい地域を児童が見つめ直す学びを設定し、将来の自分や地域を想像する絵や立体の造形教育に取り組んできた。また、津波で流された地域の自然環境や風習を取り戻し、VR等を活用した造形教育も重ねてきた。これは、子どもたち自らができる復興への取組ともなった。

これらの実践は、地域の大人やNPO、他県や外国の造形教育等に影響を与えることになった。特に、2004年のスマトラ沖津波で甚大な被害があったインドネシア・アチェ州の子どもたちや若者へ影響を与えることになり、文化や宗教を越えた造形教育の交流が行われ現在も続いている。造形教育を軸としたこれらの取組の意義と価値を問い直したとき、それは「学校教育における持続可能な発展のための教育(ESD)」と密接に関連した実践であると考えた。そこで、被災直後から現在までの造形教育の実践をESDの視点から捉え直すことを試みる。

B 10 ●教員養成課程の図画工作における対話型造形活動についての一考察

A Study on Interactive Art Activities in Art and Handicrafts of Teacher Training Course

佐藤 仁美 (Hitomi SATOH)

目白大学 Meiji University

高等教育において「能動的な学びの場」の構築が推奨されているが、教員養成課程においては、新学習指導要領の全面実施を控え、「主体的な学び」を創造する指導力のある教員を養成することが大きな使命となっている。文部科学省が2016年8月に示した「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(案)」には、子供たちの資質や能力の確実な育成に向けて、主体的で対話的な深い学びの重要性が述べられている。これは、子供たちが主体的に学びを振り返り次の学びにつなげることや、協働的な学びにより対話を重ね、多面的・多角的に考察し自身の考えを深めたり広げたりすること、学んだ知識や考え方を活用して問題解決的に探求することなどを重視するものである。本研究は、小学校教員養成課程の学びを能動的な場とするために、特に「協働的な学びにおける対話」に着目した。これまで、図画工作の対話型授業としては、鑑賞活動や造形遊びの中で取り入れられた実践が数多く報告されている。本研究での試みは、造形活動の中に「対話」を取り入れ、「対話」をしながら協働的に表現をする「対話型造形活動」の実践である。私立A大学の小学校教員養成課程の科目「図画工作」履修者を対象として実施した「対話型造形活動」の実践報告と、活動後に行ったりフレクシオンペーパーの内容をテキストマイニングの手法を用いて分析し、対話型造形活動の効果と課題を考察したものである。

C 1 ●特別支援学級における表現の喜びを育てる版画指導

—一人一人の個性を生かす支援のあり方—

How to Teach Print Arts and Assist the Support Class who Wish to Learn Print-arts with Fun and Expression :
 Ways to support and improve individuality

中條 秀憲 (Hidenori CHUJO)

一般社団法人日本板画院委員 Nippon Hangain

特別支援学級とは、軽度の障害のある児童・生徒を教育するために、小学校や中学校に設置される学級。きめの細かい指導を行うことができるよう、少人数で編制される。しかし、学級の構成員は多学年にわたっていることが多い。教育内容は、原則として小・中学校の学習指導要領に沿っているが、子供の障害の状態や特性などに応じて、独自の教科内容による指導が行われている。

ここでは、図画工作科「版画指導」を小中学校7校の特別支援学級で行った実践を紹介する。

版画の特性である、間接性、複数性、偶然性を活かし、一人一人に寄り添い、語りかけながら安全に十分配慮し、制作活動を支援する。「版」としては、紙版画、木版画、スチレン版画であるが、授業参観等の公開日に「摺り」の作業を組み入れ、保護者と共に完成の驚きと喜びを味わうように工夫する。

また作品は、全国年賀状版画コンクール（一般社団法人日本板画院主催）に応募、受賞するなど表現意欲や自信を培う場となったといえる。

C 2 ●「共視論」的考察を参考にした図画工作科教育論

A Study of the Art Education from "Viewing Together" : Viewing together, creating together, thinking together

堀井 武彦 (Takehiko HORII)

お茶の水女子大学附属小学校 Ochanomizu University Elementary School

本論は、北山修（九州大学名誉教授）編著の『「共視論」母子像の心理学』（2005）による論考を参考にしながら、筆者の図画工作科教育実践の経験則を図画工作教育論としてまとめたものである。

北山は、浮世絵に描かれた母子像に母と子が共通の対象を眺める構図が多いことに注目し、母子間の身体的交流や言語以前の情緒的交流が交わされる原初的コミュニケーション行動を日本人の母子関係の特色であるとして、その行動を「共視」と命名した。先行研究としては「共同注視（joint attention）」という概念がある。筆者は、一般的な図画工作科の学習形態（作業机を挟んで4人程度の児童が向かい合う）が、「共視」が常に行われる場であると捉え、その場で交流される造形的コミュニケーション活動の中に図画工作科特有の学びがあると直感的に考えてきた。そこで、図画工作科の学習活動に見られる典型的な児童の姿を取り上げて、「共視論」と重ね合わせる考察を試みた。折しも、平成29年3月に公示された新学習指導要領という新地図を使った航海に遭難しないための羅針盤とならんことを願った筆者の図画工作科教育実践者としての総括でもある。

C 3 ●視覚障害のある高校生の彫刻鑑賞における対話的支援の役割

The Role of Dialogue in Aesthetic Appreciation of Sculpture by High School Students with Visual Impairment

半田こづえ (Kozue HANDA)

明治学院大学非常勤講師 Meiji Gakuin University

視覚障害者が、博物館、美術館に求めている要件を調べた研究では、「視覚以外の感覚で観察・鑑賞できる展示物があること」と「学芸員などによる解説があること」が最も重要と考えられていることが示されている。また、特別支援学校の美術科の教員からは、視覚障害のある児童生徒にとって分かりやすい作品の解説についての研究を求める声が聴かれる。

そこで、本研究では、視覚障害のある高校生の触覚による彫刻鑑賞における専門家の対話的支援の役割を明らかにすることを目的とした。高校生13名の協力を得て、対話を交えた彫刻鑑賞の実験を実施し、高校生と視覚障害者の彫刻鑑賞支援に携わった経験を有する彫刻家との対話を、対話の内容に着目して分析した。結果、1) 実感を伴った作品のイメージの構築を助け、2) 造形的な観点から作品を見ることを促し、3) 製作者が作品に込めた意図に思いを馳せる対話が交わされていることが明らかとなった。さらに、高校生へのフォローアップインタビューを、対話的支援の影響の観点から分析した結果、専門家との対話は、高校生が安心して作品に向き合い、新たな気づきを得、鑑賞活動そのものを楽しむことを支える役割を果たしていると考えられた。このことは、鑑賞が人と人との間において深まる社会的な構成物であることの一つの表れと見ることができるであろう。

C 4 ●教育から見た「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の実践と分析

A Study on Practice and Analysis of Education for 'Socially Engaged Art'

結城 孝雄 (Takao YUKI)

東京家政大学 Tokyo-kasei University

畑山 未央 (Mio HATAYAMA)

東京家政大学 Tokyo-kasei University

本発表は、21世紀型スキルを念頭に置いて、教員養成課程の学生が能動的に学ぶ環境を構築し、その活動の関係者を含む形成過程に関する考察である。今日、アートを通じた地域振興やイベント活動が盛んに行われている。また学生らがその活動に主体的に取り組む事例も数多く存在する。「ソーシャリー・エンゲイジド・アート（以下SEA）」と定義されるこのような活動は、従来美術家の側面から語られることが多い。その定義を分析すれば、今日的教育観を反映したキーワード（協働、対話、認知、参加、社会的実践等）と重複することから、その活動が今日的「学び」の要素を多分に含んでいることが推測される。東京家政大学は、校祖 渡辺辰五郎翁が千葉県長南町出身であることから町と「連携協力に関する包括協定」を締結している。本活動はその一環として、美術の専門性を持たない教職課程の学生がアートを通じた地域社会（長南町）に関わるワークショップを主催者としてかかわる。学生は、設定された学習活動から、造形要素に自覚し、活動マネジメントに能動的に関わり、状況・環境に働きかけを覚醒する過程、つまり提供された枠組みを再構築する過程を経験する。本発表では、このSEAと定義する活動を教育の側面から観察し、学生、参加児童、行政担当者、ボランティア等の関係者の認識の過程を明らかにしたい。

C 5 ●図画工作科における創造活動を通した「造形的な視点」の研究Ⅱ

ー「思い」と「イメージ」の関係についてー

A Study on “Understanding of creation” through the Creation Activity in the Art Education Ⅱ :

On the relationship between “emotion” and “image”

西村 徳行 (Tokuyuki NISHIMURA)

東京学芸大学 Tokyo Gakugei University

昨年度の研究では、創造活動を通した「造形的な視点」を、「造形要素」や「造形原理」などからなる「静的な視点」と、人間の行動理解から示されたAI理論「サブサンプション・アーキテクチャー」をモデルに考えた「動的な視点」の二つの視点から検討した。本研究は、昨年度の「図画工作科における創造活動を通した『造形的な視点』の研究」につづくものである。

私たちは児童・生徒が描いた作品をみる時、そこに描かれたもの・ことだけで作品を捉えようとはしない。実際にその場で捉えた形や色だけでなく、その表す過程での様子などを、まるで複数のレイヤーのように捉え、それを重ねたり動かしたりしながら、そこにある作品をみようとする。これは作家作品においても同じことがいえるのではないだろうか。私たちが「みる」時、その行為を「ある対象に対する知覚」としてのみ考えるのであれば、そこでみえるのは「造形要素」や「造形原理」などの「静的な視点」のみである。しかし私たちの「みる」はそれだけでなく、過去や未来の事象をもつなぎ合わせながら対象をみる。知覚だけではない「造形的な視点」を支えるものとは何であるのか、本研究において検討したい。

C 6 ●ソーシャル・プラクティスによる学びの共有と「私たち感」の育成

Shared Learning and Fostering a Sense of “we-ness” through Social Practice

細野 泰久 (Yasuhisa HOSONO)

横浜国立大学大学院 YOKOHAMA National University Graduate School

平成29年3月に公示された新学習指導要領では、そのキーワードに「社会に開かれた教育課程」や「主体的・対話的で深い学び」を謳っている。変化する社会の中で学校が社会と連携・協働する「社会に開かれた教育課程」や、アクティブ・ラーニングにおける、他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」は、現実の社会に関わるアートであるソーシャル・プラクティスや、その教育場面での実践であるコミュニティ・ベースト・アート・エデュケーションと親和性が高い。

近年、世界中で盛んになってきているアートの潮流であるソーシャル・プラクティスは、地域のコミュニティに直接関わり、その具体的な変革を目指すアートである。その背景には、教育学的・心理学的・人類学的など、様々な学問的手法が用いられている。本発表では、そのようなソーシャル・プラクティスの一つであるアーティスト、オラファー・エリアソンの《Green light-アーティストティック・ワークショップ》を主な題材として検討する。ウィーン、ヒューストン、ヴェネチア、横浜等世界を巡回して行われているこのワークショップの目的や構造を分析し、造形を中心としたワークショップにおける、ソーシャル・インクルージョンを目指した学びの様相を明らかにしながら、そのようなアーティストの試みの美術教育への示唆や、その応用を検討する。

C 7 ●地域のアートモニュメント（パブリックアート）を活用した鑑賞題材の作成と実践

ーWebサイト『堺・アートクルーズ』を通してー

Creation and Practice of the Appreciation Subject which Utilized a Local Art Monument (Public Art) :
Through a Web site "Sakai・Art Cruise"

田中 圭一 (Keiichi TANAKA)

堺市立美原西中学校 Sakai Municipal Miharinishi Junior High School

鑑賞の学習においては、地域の美術館・博物館等を活用することで、実物の美術作品を鑑賞する機会が得られるようにしたり、作家や学芸員等と連携したりして、可能な限り多様な鑑賞体験の場を設定することが求められている。しかしながら、地域によっては美術館・博物館等の施設の設置状況や学校の地理的条件等により、十分にその活用が進みにくい実態がある。

一方で次期学習指導要領改訂の基本方針においては、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」を実現することが強く示されている。また、教育課程の実施に当たっては地域の人的・物質的資源の活用が重要であるとも指摘されており、今後、図画工作科・美術科の授業においてもこれまで以上に地域や社会との連携や地域の教育資源を活用した取り組みが求められるものと思われる。

このような状況の中、堺市では、“まち”全体を美術館に見立て、地域資源である市内各地に点在するアートモニュメント（パブリックアート）をWeb上でひとつにまとめ、鑑賞教育に資するようWebサイト『堺・アートクルーズ』(<http://sac.sakai.ed.jp/>)を作成、運営している。

本発表では、同サイトの制作の意図や経緯及び内容を紹介するとともに、市内の各学校の授業で取り組んだ実践について報告するものである。

C 8 ●朝鑑賞の取り組みと成果報告

The Activities and the Results about Morning Appreciation of Pictures

三澤 一実 (Kazumi MISAWA)

武蔵野美術大学 Musashino Art University

平成28年度、年間を通して所沢市立三ヶ島中学校で朝読書に代わり週1回朝鑑賞を行った。その結果、1年後のH29年度には国語の書く力の得点が所沢市平均に比べ+3.8点から+7.1点へ、そして満点率が32%から56%に向上した（現3年生）。また、現2年生は1年次に比べ、書く力の得点が市平均より-21.1点から+2.0点へ向上した。（平成29年度所沢市第1回ステップアップ調査結果より）

朝鑑賞を始める着想は平成26年度に所沢市立北小学校で行った「旅するムサビ」での該当クラス担任の話である。話の内容は、朝の「黒板ジャック」、そして1時間目の対話型鑑賞を経た2時間目の算数の時間、今までになく集中力が高かったという談話である。そこで、対話型の鑑賞は集中力を高め学習に向かう力を高めるのではないかと仮説を立ててみた。

平成27年度に所沢市立三ヶ島中学校で初めての「旅するムサビ」を行った際、生徒は自分の考えを言葉にして表すことが苦手であると感じた。校長は学力向上が本校の課題だと言う。そこで鑑賞教育の充実と週に1回の朝鑑賞の提案をした。平成27年度は校内研修会で筆者が講師となり鑑賞活動の有効性に関する話しをし、校内の教員集団に対して理解を図る朝鑑賞の準備の年となった。そして平成28年の5月から朝鑑賞を本格的にスタートさせるに至った。

今回はその途中経過として、1年間行った朝鑑賞のシステム及び成果と課題を研究ノートとして発表する。

C 9 ●地域に根差した美術教育運動

A Movement of Art Education Rooted in Local Regions

名取 初穂 (Hatsuho NATORI)

國學院大學栃木短期大学 Kokugakuin Tochigi Junior College

伊澤 学 (Manabu IZAWA)

一般社団法人真岡青年会議所 Moka Junior Chamber, Inc

本発表は芳賀地区の児童美術展に関する総括であり、近年その活動を束ねてきた真岡青年会議所第48代理事長伊澤と、美術展における「子ども審査会」に携わる名取による共同発表である。

戦後の美術教育発祥の地として知られる栃木県真岡市では、真岡青年会議所子ども未来創造委員らが中心となり「創造美育」の理念に即した多様な活動を企画・運営している。「創造美育」とは、教育学者久保貞次郎らが提唱した、戦後日本の美術教育史に大きな影響を与えた民間の美術教育運動である。戦前の日本における管理主義教育のもとでは、子どもの描く絵は教科書に掲載された手本を忠実に模写する「臨画」であった。1952年に創造美育協会が設立され、子どもの絵には独自の意味や価値があるとする「創造美育」の視点が日本全国に波及し、初めて子どもの絵の本来的な価値が承認されたことは周知のとおりである。

半世紀経った今日も真岡市久保講堂では毎年「芳賀教育美術展」が開催され、久保氏の理念は地域に根付きながら現代に引き継がれている。2016年度は新たな展開として、地域の子どもの美術展の審査員を務める「子ども審査会」を試行した。公開審査により市民が子どもの見方・感じ方を知ることは、より良い地域社会を創生していくために重要な要素であると考え、地域に根差した活動を展開してきた真岡青年会議所の取り組みを総括し、真岡における現代の美術教育運動の今後を展望したい。

C 10 ●「アクティブ・ラーニング」を取り入れた造形活動における資質・能力の把握と課題

ー小学校「ものづくり部」における「深い学び」に関する考察ー

Understanding of competency and Problems in a Visual Art through 'Active learning' :

A Discussion of Interactive and Independent Deep Learning in Elementary School "Monozukuri club"

中村 儒纏 (Hitomi NAKAMURA)

東京藝術大学大学院博士課程 Tokyo University of the Arts, Doctoral Course

本発表では、「アクティブ・ラーニング (Active Learning: AL)」を取り入れた造形活動における「深い学び」について、資質・能力によりその学びの深さを把握し、より「深い学び」へつながる活動のあり方を検討したい。

2017年2月に示された小中学校の学習指導要領改定案から、「AL」という用語が消え、「主体的・対話的で深い学び」と言い換えられた。これには学習形態レベルでの授業改善の取り組みに陥らない為などの理由が付されており、義務教育においては、これまで積み重ねられてきた様々な授業改善を継承発展させることが重要であると、繰り返し指摘されている。「AL」という視点から、活動の方法ではなく、学びの内容とその質を問い、高めるにはどうしたらよいのだろうか。

そこで、造形教科と他教科における相違点と、共通点とがわかる汎用的資質・能力を軸としたルーブリックを用い、「AL」を取り入れた造形活動における「深い学び」について考察する。考察には、新学習指導要領の検討に用いられた、石井英真の「教科の学力・学習の3層構造と資質能力の要素」等を用いる。また、具体的な「AL」を取り入れた造形活動として、「ものづくり部 (※)」の活動について分析する。それらの結果と考察から、資質・能力ベースのカリキュラムによる活動の危険性をふまえ、今後の「AL」を取り入れた造形活動の在り方を探る。

※「ものづくり部」:「何をつくりたい (したい) か」「どのようにつくるか」「何が必要か」「公表をどうするか」等を自分たちで考え実現していく放課後の課外活動である。小学校4～6年生の有志を対象とし、部活として、週に約3回、2008-2012年度の5年間で84の題材実践を行っている。

D1 ●幼児の体験と表現

Infant's Experience and Expression

堀 新菜 (Niina HORI)

和光鶴川幼稚園 Wako Tsurukawa Kindergarten

子どもたちとの描画の活動を行っていく中では、ただ絵を描くのではなく、子どもたちが楽しんだこと、驚いたこと、触れたもの、発見があったこと、生活の中での経験や感じた事を大事にしていきたい、という思いを持って題材を選んでいきます。

幼児期の表現は体験がベースにありそこからの関わりで表現していくことが大切だと考えています。体験したことのどこを採取るかで描画にする時の違いも出てきます。ノビルの絵では形や香りからイメージの発展が出てきているのに対し、タケノコの絵は自分で掘って運んだ実感が表れています。どんな体験をしたか何を感じたかで画面に現れてくるものも違ってきます。

子どもの生活が生み出していく表現もあり、子どもは大人が見逃すようなところもよく見えています。年中の時に見つけたカマキリの卵から赤ちゃんが生まれた時は驚きと感動にあふれていました。子どもたちは自分を主体として客体としてのカマキリを観察し一場面をカットし表現することを楽しんだ時に、子どもたちは画面を自分の想いで構成できる事を知っていきます。そこからポーズの絵へと繋がり、今度は自分を客体化し自分の行動を形として客観的なものにしてイメージの自分を描いていきます。体験画を描くところではカマキリとポーズでの経験が繋がり、自分と友だちが客体化されそこに体験したことも表現されてきます。体験したことや友達との関係があってこそ描かれるのだと考えています。

D2 ●大人が描く子どもの絵

ー園での造形活動や図工の時間に生かすための実践活動ー

Adults Draw Children's Pictures :

Practical Actions to Make Use of Pictures of Children Drawing by Adults within Art Class of Nursery and Kindergarten and Elementary School

木谷 安憲 (Yasunori KIDANI)

川口短期大学 Kawaguchi Junior College

本発表は、造形・図工の指導者が、子どもと同じ題材の絵を描くことで何が見えてくるのか、筆者の体験を通して記録・分析したものである。範囲は1歳児から小学校6年生までとした。自分がどんなことを感じ、描いていく中でいかなる判断をして、どのような力がついたのか。その成果を今後の指導に生かしていくために、どのようなことをすればよいか探るのが研究の目的である。

多くの指導者にとっては、児童画の魅力を感じたり読み取りをすることは経験を重ね自明のことが多いのかもしれない。しかし、子どもの絵と接する回数がまだ少ない指導者やこれから現場に出て行く学生にとっては、未知のことがたくさんあるはずだ。子どもの表現を受け止め大切にするために、まず教師自身が、子ども達と同じような絵を描くことも指導の一助になるのではないか。そうすることで自分の中にある表現することの喜びや難しさが見えてきて、子ども達との共通点や相違点が見えてくるのではないかと考えた。

ただし、この研究は一人で行ったため保育の現場や学校の授業と違い、先生が不在である。指導者の役は自分でするとしても、絵の話を聞いてもらう聞き手の存在が必要と考えた。そこで、今回は絵本作家である筆者の妻にその役をしてもらうことにした。物語ること絵がどのように変容していくのか、合わせて考察する。

D 3 ● 肢体不自由特別支援学校の美術科指導における目標設定の方法に関する実践研究 I

ー実践に対するSTの認識に着目してー

Practical Study on Methods of the Goal Setting in Art Education of Special Needs School for Physically Handicapped Children I :

Focus on the sub-teacher's awareness to the practice

森田 亮 (Ryo MORITA)

筑波大学大学院 Master's Program in Education, University of Tsukuba

重複障害のある生徒の美術科指導にあたっては、生徒の実態に応じた目標設定と手立ての検討が求められる。筆者はこれまで、独自に作成した評価基準表（ルーブリック）による授業毎の学習状況の評価が、生徒に対する段階的な目標設定と手立ての検討につながることを、事例研究により示してきた。本研究は、こうした取り組みに基づいて開発した「目標設定シート」が、目標設定のツールとしてどのような有用性をもつのか、仮説生成を目的とする。専科教員である筆者とともに実践に取り組んだ2名の補助教員（以下、ST）は、目標設定シートが役に立ち、美術の授業づくりに取り組みやすかったと質問紙に回答した。そこで、STの面接データを、「取り組みやすさを感じるようになったプロセス」をテーマにM-GTAを用いて分析し、仮説モデルを生成した。

仮説モデルの考察から、STにとっての目標設定シート活用の有用性として、以下の仮説が得られた。①：担当生徒の実態に合った明確な目標の設定ができる。②：①による生徒の目指す姿の明確化は、手立ての検討に際して、STが学級担任としての知見を専科教員に提供する協働的な対話を生む。③：②の経験と指導の手ごたえは、STに自身の役割や美術の独自性を認識させ、美術の授業づくりに対して抱いていた参画しづらいというイメージを解消する。

今後は、上記仮説を指導記録から検証し、目標設定シート活用の有用性を明らかにする。

D 4 ● 小学校高学年における鑑賞活動カリキュラムの研究

Study of The Art Appreciation in Elementary School Upper Grades

大杉 健 (Takeshi OSUGI)

府中市立若松小学校 Fuchu Municipal Wakamatsu Elementary School, Tokyo

学習指導要領に美術館等での鑑賞活動が明示され、美術館学芸員の教育普及への熱心な取り組みもあり、ここ数年、各地各学校において鑑賞活動が活発に行われるようになってきている。そして、その活動の様子や研究の成果などが様々な研究会において、学校教育者の立場からや美術館学芸員の立場から発表されている。これらの発表は、学校と美術館の連携のとり方、作品の選定について、実際の鑑賞活動時の導入や展開、ギャラリートークでの声掛けの仕方、児童の考えや意見の取り上げ方、時間配分について、まとめの仕方等、参考になる内容のものも多い。

一方、実際の授業では、美術館作品の鑑賞だけではなく、自分たちが描いたりつくったりした作品の鑑賞も日常的な授業で自然に行われていたり、高学年においては、鑑賞と表現を関連させた内容についても取り組まれることも多い。そこで、本研究では、美術館での鑑賞だけでなく、これらの日常の鑑賞活動もふくめて、勤務校で行っている10歳（小学校4年生）から12歳（小学校6年生）の3年間の鑑賞活動の実際例にもとにして、児童の成長を視点として鑑賞活動の内容やそこでの学びを考察し、この時期における鑑賞のカリキュラムのあり方を提案する。

D 5 ●保育士及び幼稚園・小学校教員養成系学部におけるデザイン思考を活用した学びの研究

Study on Learning by Making Use of Design Thinking in Faculty of Teacher Training

直井 崇 (Takashi NAOI)

東京成徳大学 Tokyo Seitoku University

筆者は教員養成系学部にて、保育士や幼稚園・小学校教員を目指す学生に対して、造形や図画工作に関する授業を担当している。

筆者の願いは、学生が将来、保育士や幼稚園・小学校教員となった際、幼児や児童が楽しみとするような造形や図画工作に取り組んでほしいと願っている。その実現に向けて筆者が取り組むべきことは、学生にとって楽しく能動的に、できる限り多くの学修ができる授業を行うことと考え、教育及び研究に励んでいる。上記の日々の中で、学生がアイデアなどの「発想」に対して苦手意識を抱えていることに気が付いた。そのため、どのような授業を行えば学生にとって、「発想」することについて学修できるかを考えた。そこでデザイン思考を活用したポスター制作を行った。デザイン思考を活用することによって、アイデアなどの「発想」について学修することに加え、多くの学びが期待できると考えたためである。

デザイン思考を活用し、グループでブレインストーミングや制作・発表を行ったところ、学生の「発想」に対する考え方の変容が確認された。また「発想」だけでなく、プレゼンテーションやICTなどに対する考え方の変容も確認された。

D 6 ●保育者養成における粘土制作体験の教育的意義に関する一考察

－授業観察とアンケート調査に基づいて－

Considering Educational Implications of Clay Arts Experience in Nursery Teacher Training :

Based on Class Observation and Questionnaire Survey

三上 慧 (Kei MIKAMI)

湘北短期大学非常勤講師 Shohoku Junior College

今日、子どもの心に寄り添う存在である保育者の資質・能力の内実が問われている。保育者養成機関では、将来を見据えて保育者志望生の学びのあり方を再考し、彼らが自己体験を積み重ね、子どもの遊びに向き合い、自律的・協働的・省察的に専門的力量を身につけることができるように、効果的な足場かけを工夫する必要がある。本研究は、短大保育学科「造形」の授業課題「テラコッタ粘土制作」において、授業観察とアンケート調査に基づき、保育者志望生の粘土制作体験の教育的意義について考察することが目的である。授業の過程は、「土練り、成形、素焼き窯入れ・窯出し、施釉、本焼き窯入れ・窯出し、作品撮影、撮影データ鑑賞」である。最終授業では、受講者が各自のテラコッタ粘土制作体験を省察し、保育の現場に活用していくことを考える機会となるように考案された「ふりかえりアンケート」に取り組んだ。本研究による毎回の授業観察と最終回のアンケートを分析データとして考察した結果、本課題を通して、学生たちそれぞれが粘土の特性を捉え保育の中で活用していく心の準備をすることができたと理解される。粘土の特性である触覚性に着目するコメントが多く見受けられ、実際のものに触れ素材について認知を深めたと考える。本課題の教育的意義をさらに探求するために、また新たに生じた課題について検証するために、今後とも継続的に授業の実践・研究を進めていきたい。

D7 ●幼小中連携から見えてくること

ー横浜公立小中学校図工・美術実践現場からの報告ー

Considering Educational Implications of Clay Arts Experience in Nursery :

Teacher training based on class observation and questionnaire survey

金阿彌 勉 (Tsutomu KANAAMI)

横浜市立泉が丘中学校 Yokohama City Municipal Izumigaoka Junior High School

松本 有加 (Yuuka MATSUMOTO)

横浜市立二つ橋小学校 Yokohama City Municipal Futatsubashi Elementary School

笠本 健太 (Kenta KASAMOTO)

横浜市立西寺尾小学校 Yokohama City Municipal Nishiterao Elementary School

今回は、横浜市公立小中学校で図工・美術の指導を行っている3名の共同研究として実践研究報告を行う。

発表者の構成は、長年幼稚園教諭として幼児期の表現指導に関わり、その後の育ちを見届けたい思いで小学校教諭となった松本。小学校教諭として高学年を中心に図工教育に関わり、昨年度の第56回関東甲信越静地区造形教育研究大会で授業実践を行い、横浜市教育課程研究委員としても活躍中の笠本。小中連携や教育課程の研究・横浜美術館との共同研究にも関わっている金阿彌の3名で、発達段階に応じた指導実践を通し、日頃感じている課題や指導の成果を交え、研究題目について発表する。

松本は、幼児期の個性の発現と伸長のために大切な「思うまま自由に描かせる」とことと、小学校での「教え込み」のギャップに悩んだ経験から見えてきたものを中心に発表。

笠本は、一人の表現者として自立していく時期の高学年児童との関わりから、「いかにそこまでの学びや育ってきた感性を掘り起こしていくか」という視点での発表。

金阿彌は「絵画表現への苦手意識」が刷り込まれた中学生を、様々な色彩指導のアプローチで苦手意識を解消していく試みの実践報告を行う。今回の共同研究で、私たち自身が幼小中連携から見えてきたことや学びを発表し、様々な意見を拝聴したいと考えている。

D8 ●英語活動を取り入れた図画工作科の授業開発

ー美術作品の鑑賞を生かした表現の試みー

Developing Arts and Crafts Teaching Introduced Basic English :

Some trials of expressions based on art work appreciation

樋口 和美 (Kazumi HIGUCHI)

福岡教育大学非常勤講師 Fukuoka University of Education

藤井 康子 (Yasuko FUJII)

大分大学 Oita University

本研究は、英語学習を取り入れた図画工作科の学習内容と指導法について実践を通して検討するものである。母国語以外の言語で教科の内容を学ぶ内容言語統合型学習 (CLIL: Content and Language Integrated Learning) の教育理論に学びながら、学級担任が英語も使って指導を行う教育実践例を開発するとともに、その効果についても検証していく。発表者の一人 (藤井) が図画工作科担当教員と言語指導者であるALT (外国語指導助手) とのチームティーチング授業のために開発した授業と、学級担任が単独で行う授業との比較検討を行う。ノンネイティブの学級担任のための授業案を作成するため、クラスルームイングリッシュの検討と、対象学年の発達段階や英語レベルを考慮した内容へと若干の修正を加えた。本授業は、新学習指導要領に示される外国語活動と図画工作科の指導内容である知識及び技能の応用力をはぐくむことをねらいとした。

今回は、大学美術教育学会札幌大会 (2016/09/24) での「外国語活動を取り入れた図画工作科の教科融合型学習の授業開発研究」の内容と発表者の一人 (藤井) による日本美術教育研究発表会 (2016/10/16) 「英語活動を取り入れた図画工作科の内容言語統合型学習の授業開発」の内容を踏まえ、福岡市の小学校教員と共同で行った授業の分析を行い、図画工作科の授業に英語学習を取り入れた指導方法についての考察を示す。

D 9 ●知的障害児のコミュニケーション能力を促す造形授業の一考察

A Case Study of Art Education that promotes Communicative Competency for Children with Intellectual Disabilities

森 芸恵 (Norie MORI)

筑波大学附属大塚特別支援学校 School for the Mentally Challenged at Otsuka
／筑波大学大学院博士課程 University of Tsukuba Graduate School, University of Tsukuba

発表者は、これまでに知的障害児を対象とした特別支援学校の造形授業におけるコミュニケーションに関する研究を継続的に取り組んでいる。その成果として、造形活動中の知的障害児の発語を抽出してカテゴリー化し、さらに質的レベルを設定することにより、コミュニケーションの仮設モデルを生成した。本発表では、そのコミュニケーション仮設モデルを元にした5つの授業による事例児童のコミュニケーションの量的・質的変容について検討する。対象児は同学年の広汎性発達障害児bとダウン症児aである。5つの授業では、2人でのペア活動や小グループでの「話し合い」を取り入れている。対象児bにとって、子供同士のコミュニケーションが量的に多かった授業は「話し合い」を取り入れた授業であった。しかしながら、a児では、2人でのペア活動を取り入れた授業が子供同士のコミュニケーションを量的に促していた。これらの要因について、事例児童bの変容に着目して考察する。

D 10 ●幼児教育における描画活動の環境設定と意義

Environment setting and significance of drawing activities in early childhood education

鈴木紗都子 (Satoko SUZUKI)

東京家政大学家政学部4年 Tokyo-kasei University

本研究では、保育所・幼稚園で描画活動を行う際、子どもが満足でき、楽しんで取り組むことができる環境設定について考察します。従来、描画活動とは、子ども自身が自らを表現する基本的な活動の一つと考えられてきました。しかし、近年メディアの発達によって描画活動を行う時間が減少傾向にあると考えられます。さらに、幼児教育においては、保育者の写実の観点から、技能やスキルが重視され、自然発生的な表現活動が尊重されない状況にあることも推測されます。幼児期から「絵が嫌い」という実態が生まれていることを看過することはできません。

したがって、子どもたちが自ら絵を描きたい気持ちが芽生え、日々の生活に関心が繋がっていき、時空間を越えた創造活動として、保育者と子どもが対話する活動が重要と考えられます。

そのために、描画活動を行うときの素材、画材についての検討、さらに教育施設だけでなく、家庭教育でも行う描画活動の重要性・方法についても考えていきます。子どもたちにとって楽しく描くことができるテーマ、素材、支持体（用紙）、画材についての再検討をします。このように描画活動を再認識して、先行研究と実践から分析を行い、具体的な提案を行います。

E1 ●テキストから豊かに紡ぎだされる視覚イメージの考察

ー国語教科書の物語文『ごんぎつね』を描く視点ー

Study of Making Rich Visual Imagination from Text :

The point of view about drawing "GONGITSUNE" in the textbook of elementary school

松井 素子 (Motoko MATSUI)

東京学芸大学大学院連合教育学研究科 Tokyo Gakugei University United Graduate School of Education

美術教育においてイメージ豊かに発想する能力を養う重要性は、多くの研究者が指摘し周知のものである。図画工作科の教科書には、本を読んで好きな場面をイメージ豊かに描く題材が、各学年において設定されている。近年、家庭での映像視聴やデジタル機器等に割く時間の増大から子供たちの読書量に格差が広がり、既読のものとして国語の教科書に掲載されている物語文を活用することも多い。そのような場合、教科書の挿絵の影響を最小限にし、いかに個々の児童のイメージを育むことができるのかが問題になってくる。そこで本研究では、日本で全ての四年生が国語科で学ぶ『ごんぎつね』の本文のみを基にした五年生の読書感想画の授業実践について考察する。

『ごんぎつね』は日本の原風景である里山が舞台であり、伝統的な農村社会に特有の事物・情景・風俗・習慣・季節感などが随所に表現されている。子供たちはこれらに関する生きた知識や実感の欠如を写真集や資料集で補いながら、教科書で見た挿絵とは異なる自分のイメージを模索して作品を仕上げていった。それらの作品を理論言語学に基づく「視点の関係」において客観的・主観的・準主観的アングル（菅井、2013）に分類した結果、いくつかの作品が、登場人物の兵十の内面の視点で描かれていた。子供たちのどのような視点が『ごんぎつね』の主題である「兵十とごんの心情理解」という深い「読み」へ、イメージ豊かに広げさせたのかを検証する。

E2 ●子どもの「とらえ直し」についての研究

ーユーモアの発現に着目してー

A Study on the Actual Situation that Children "Reinterpret" Familiar Things :

Focusing on how Child's Humor Appears

北澤 俊之 (Toshiyuki KITAZAWA)

東洋大学 Toyo University

本研究は、身のまわりの事物をいつもと異なる視点でとらえ直す子どもの姿を明らかにしようとするものである。これまで筆者は、日常を新鮮な視点でとらえ直すとするまなざしやその姿勢を育むための造形教育プログラムの研究を行ってきた。近年は、その評価を目的として、小中学校の子どもたちを対象としたいくつかのプログラム試案を実践している。そのような中、子どもの「とらえ直し」姿が少しずつ明らかになってきた。

たとえば「見たて」を課題とする複数のプログラムにおいて、子どもたちは学年に関わりなく多様な対象を異なる視点からとらえ直すことができた。しかし一方、必ずしも新しい視点でとらえ直すことを求めないプログラムでは、既知の知識を誠実になぞろうとする子や、あえてそこから逸脱することを面白がる子など、彼らの取り組みは分化し、そこには学年に応じた一定の傾向を認めることができた。このことを発達の側面からみれば、既成の意味や価値から逸脱しようとする遊び心の発現には、「概念形成」と社会化に伴う「規範意識」が少なからず作用していることがわかる。こうした点も十分にふまえ、本発表では、しなやかで豊かなものの見方や考え方を育む場を造形教育に位置づけることの意義やその方途について提案できればと考える。

E 3 ●創造主義を支えるシステムの顕在化Ⅱ

－美術教育における大正新教育との邂逅と乖離－

Actuality of System that support the Creativity :

Meeting and divergence with taisho new education in art education

小林 貴史 (Takashi KOBAYASHI)

東京造形大学 Tokyo Zokei University

前回の発表においては、日本の美術教育がジョン・デューイの教育思想をどのように受容してきたのかについて触れた。ここでは、大正期の学校教育の一部が新教育として美術教育の有り様を模索していた事実と共に、当時の自由画教育に代表される新たな図画教育運動が新教育の展開との間に接点をもちながらも、新教育とは異なる独自の路線のもとパラレルな関係にあったことも確認した。このことは、その後、戦後にも引き継がれていく創造主義とそれを標榜する美術教育の立ち位置を検証していく上では、留意しなければならないことであると考え。今回の発表では、大正新教育と当時の美術教育との関係をもう一度ていねいに見ていくことから、美術教育が何に支えられていたのか、そしてその可能性と限界がどこにあったのかについて考えていきたい。

学校教育における美術教育が教科としての独自性とその教育としての力をよりよく発揮していくためには、そこには何が求められるべきなのであろうか。この問いは、今日の教育が様々な課題を抱えた社会を背景として新たな展開を求められる中においても、いまだ私たちに問われ続けられているといえよう。その答えのひとつが創造主義としての美術教育を支えるシステムであるならば、それを顕在化していく手立てとしてこれまでの歴史的経緯の中で見失われてきたことを確認していくことは必要なことと考える。

E 4 ●表現活動としての掃除を通した価値観の転換

－「モウソウジ」プロジェクトをもとに－

Conversion of values through cleaning as expressive activities :

Based on MOUSOUJI project

高木 路子 (Fukiko TAKAGI)

群馬大学大学院 Gunma University

まちに落ちているゴミは一体誰が落として（捨てて）、今後どうなっていくのだろう。「モウソウジ」とは、妄想＋掃除の融合した、集団でまちを歩き、落ちているゴミの物語を妄想し、見慣れたまちの見方に新たな視点を生み出そうというワークショップである。また、その妄想や出来事への想いを他者と共有することで価値観の共有を試み、他者理解を深めることを目的とする。筆者が、大学の学生や地域住民、子ども、障がい者等多様な人々と大学の校内やまちを掃除する「掃除部」という活動を企画し行う中で、コミュニケーションツールとしての掃除の役割や、日常風景の異化といった効果があると考え、ワークショップという共同で合意形成や他者理解を行う学習の方法と融合することで、このプロジェクトが生まれた。まちづくりやアートプロジェクトとの融和性を整理しつつ、掃除や廃棄物という日常的で時に社会的に見捨てられた余剰物を見つめ捉えなおすことを通して、日常/非日常、芸術/非芸術、有用/無用、排除/包摂などの流動的な境界を探り、ワークショップの手法を用いて、美術教育としての清掃の有用性を検討する。

E 5 ●廃材を用いた環境教育

Environmental Education using waste

高橋 遥 (Haruka TAKAHASHI)

東京家政大学家政学部4年 Tokyo-kasei University

本題では、小学校における環境教育に視点を置き、特に図画工作科での廃材を用いた授業の提案を行う。今日、環境問題への対応が人類存続と繁栄にとって緊急かつ重要な課題となっており、持続可能な社会を構築することが大切になっている。そのために、学校教育など様々な機会を通じて、児童生徒が環境についての理解を深め、環境を守るための行動がとれる教育の一層の充実を図ることを推進している。そこで、環境問題の中でも子どもたちの身近な問題であると考え、「ごみ問題」に着目し、図画工作科における環境教育について考えた。その際、レヴィ＝ストロースのブリコラージュ論を用いて考える。廃材＝素材と考え、加工して利用するのではなく、加工せずその物のよさを活かすということを大切にしたいと考えている。使わなくなったものをすぐにごみだとするのではなく、まだ何かの役に立つだろうという子どもたちの物の見方の変容を測り、新たな価値を見出すことのできる授業実践の提案を行う。

E 6 ●子どもの美的体験における比喩的イメージの活用と課題 VI

ーメタファー写像によるイメージの生成と操作ー

Utilization of Metaphorical Images of Children's Aesthetic Experiences and its Issues VI :

Generation and treatment of images by metaphorical mapping

立川 泰史 (Yasushi TACHIKAWA)

東京家政学院大学 Tokyo Kasei Gakuin University

本研究は、拙稿「子どもの美的経験における比喩的イメージの活用と課題ー非命題型提案からはじまる題材実践を中心にー」を発端とする同主題の研究Ⅰ～Ⅴの継続研究である。これまでの研究では、造形活動を「美的体験」と位置づけ、子どもの主題となる物語の生成過程に着目し、実践的な考察を行った。結果、子どもの物語は日常経験に基づく「認識の比喩的な拡張や改編」によって編まれること、また対象を美的に体験する文脈で生じる「身体感覚や思考言語」が寄与していることなどが明らかになった。特に、発想・構想におけるイメージの生成は、単に「見立て」という枠組みに収束できない「概念を比喩的に拡張する処理操作」が認められた。以上から、形や色（造形言語）として表出する前に「概念」として写像されるイメージは、表したいことの心的表象でとなるまでに、身体や記憶の図式を思考言語とともに意味づけるプロセスを含むと想定できる。

このような視点から、本論考では幼児・児童の描画プロセスを観察し、イメージの比喩的生成の諸相を明らかにしていきたい。そこで、「言語の問題」として始まった比喩論が、見方・考え方を拡張する「概念の問題」として捉え直された経緯とトピックを整理し、それらと観察できた「イメージの比喩的生成や操作」を個々重ねながら検討していく。

E 7 ●日本美術教育連合「山形文庫」の持続的な活用と美術教育研究の発展を目指して

For sustainable use of 'Yamagata Collection' (owned by InSEA in Japan) and development of art education studies

箕輪佳奈恵 (Kanae MINOWA)

筑波大学 University of Tsukuba

直江俊雄 (Toshio NAOE)

筑波大学 University of Tsukuba

山形寛(1888-1972)は、日本の美術教育研究における先駆者的存在である。師範学校教員として教鞭を執る傍ら、図画・手工の教科書編纂に取り組むなど、大正・昭和の美術教育を牽引してきた。晩年の著である『日本美術教育史』は、日本の美術教育の歴史を物語る資料としては最初期のものであり、今尚多くの研究者に引用される大著である。

その山形が収集した総資料数約2500点に及ぶ「山形文庫」は、明治初期の教科書や海外の子どもの作品など一次資料も多数含む貴重なコレクションであり、彼の死後、遺族から日本美術教育連合に寄贈された。筑波大学では連合から寄託を受け、今日まで「山形文庫」を保管してきたが、余りに膨大なため研究用に閲覧可能な状態にまで整理することが難しく、その価値は存分に活かされてはこなかった。

そこで発表者らは、「山形文庫」を活用した研究課題創出の端緒とすべく、今年度「筑波大学芸術系研究プロジェクト」の助成を受けて、芸術教育アーカイブの創設に着手した。「山形文庫」をはじめ、多数の貴重な古書を整理しアーカイブ化することで、例えば英国美術教育アーカイブのような、美術教育研究に携わる人々に後世まで活用してもらえる場として発展させることを見据えている。

今回はその経過報告として、「山形文庫」収蔵資料の概要や、現在までに明らかになった特徴を報告し、今後の美術教育研究支援に向けて発展の方途を探る発表としたい。

E 8 ●子供が自分らしさに気付く図画工作科の授業づくり

Study of the Art Education that Children Notice a Quality of Oneself

高橋英理子 (Eriko TAKAHASHI)

岡山大学教育学部附属小学校

Elementary school attached to the Okayama University Department of Education

「子供がつくった作品はその子自身を表す」とよくいわれるが、子供が自分自身のよさや特徴をとらえ主体的に表現できる造形活動をおこなうことで、より自分らしさに気付くことができるのではないかと考える。自分らしさへの気付きは、自己肯定感を高め自分に自信をもつことや、自分と同じように他者を大切にすることにもつながりそうである。そこで、10歳という節目を迎える第4学年の子供達を対象に、“わたしがわたしに贈るトロフィー”という自分自身をテーマに取り入れた題材を考え、授業をおこなってみた。

第4学年「365日のたからもの」(全10時間)は、以下のような特徴をもつ題材として設定した。

- ①自分の好きなことやもの、思い出や夢などを紙粘土のトロフィーとして表現する
- ②他学年・他教科等での学習とつなげ、総合的に自分自身を見つめていく
- ③高学年へ向けて具象的な表現の表れる時期であることを想定し、子供が形や色、配置の様々な表現の工夫をおこなうことができる

子供が造形的な工夫をおこなう姿や互いに鑑賞しながらよさを伝え合う姿など、子供の造形活動の過程を指導のポイントとともに追っていきながら、次第に自分らしさに気付き、自信をもちトロフィーをつくりあげていく様子を報告する。

E 9 ●発想や構想の能力と資質・能力論

Ability to Generate/Conceive Ideas and Theory of Competency

山田 一美 (Kazumi YAMADA)
東京学芸大学 Tokyo Gakugei University

図画工作科で育成する「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力は、「発想や構想の能力」に置き換えられ、①「A表現」を通して育成する「発想や構想の能力」、②「B鑑賞」を通して育成する「発想や構想の能力」、③「共通事項」で育成する「発想や構想の能力」と読み替えることができる。

①については、これまでの「主に表現の始まりにおける発想や構想の能力」(事項ア)と、「主に表現の過程における発想や構想の能力」(事項イ)はひとつにまとめられている。②については、「教科の目標(2)」の文言でいえば、「作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにすること」に示される。③については、「共通事項」イ「形や色などを基に、自分のイメージをもつこと」に当たる。「自分のイメージをもつ」ことは、対象や事象の体系的な枠組やネットワーク、見えない部分をも見通した全体の関係や構造まで深く捉えることにもつながる一方で、表面的な見方・捉え方、浅い知識の範囲で終わる場合も考えられる。

したがって、しなやかな思考や美的判断力、形や色などを使ってまとめあげる表現力等の資質・能力、言い換えれば発想や構想の能力が十分に発揮される中で、児童は造形的な視点に立った「イメージをもつ」ことが可能となる。子どもたちの今と近未来をひらく資質・能力として、「発想や構想の能力」等の認識が極めて重要な論点となっている。

E 10 ●ジェネリック・スキル獲得を目指したアクティブ・ラーニングによる版画教育実践

Practice of Print education by active learning for generic skill acquisition

大貫真寿美 (Masumi OHNUKI)
帝京大学短期大学 Teikyo University Junior College
三好 昭子 (Akiko MIYOSHI)
帝京大学短期大学 Teikyo University Junior College
三好 力 (Chikara MIYOSHI)
秋草学園短期大学 Akikusa Gakuen Junior College

本研究は美術を専門としない大学・短期大学における美術教育研究であり、美術教育の社会的汎用性を授業実践から証明する一連の研究である。これまで筆者らは、筆者担当科目の授業実践研究と実践を元に心理学を援用し考察するという方法を用いてきた。例えば大貫・三好・三好(2016)は、「芸術と社会貢献」の1 Semester受講後に、ジェネリック・スキルの1つであるソーシャルスキルが有意に上昇し、アイデンティティ発達における「第Ⅲ段階：主導性」も上昇傾向にあることを示した。

授業はアクティブ・ラーニングを念頭に、ジェネリック・スキルの獲得を目指して行なった。版画制作は単にアイデアスケッチを再現したものだと捉えられがちであるが、実際は試行錯誤の連続である。この試行錯誤を主体的な学びの根幹に据えた。「版画」を受講した61名の学生を対象に、半期(全15回)の授業を通してどのような能力が身に付いたと思うかについて、半期受講終了時に自由記述形式で回答させた。回答は心理学研究者2名により、KJ法を用いて分析された。本研究では総合大学における「版画」の授業実践を具体的に報告し、「版画」を受講することによって、学生自身がどのような能力を身に付けることができたと感じているかを明らかにした。その結果、「版画」を受講したことにより、ジェネリック・スキルを獲得できたことが示され、美術教育における「版画」教育の特性も示唆された。

第51号 日本美術教育研究論集 2018

【投稿および掲載要項】

研究論集編集委員会

投 稿 要 項

- 投稿条件： 第51回日本美術教育研究発表会の研究発表者は、『第51号研究論集2018』に投稿できます。投稿論文の研究論集への掲載は、次の(1)～(5)の条件を全て満たしたものに限ります。
- (1) 投稿原稿が、研究発表会における発表内容と基本的に同じ内容であること。
 - (2) 投稿原稿が、研究論集の要項に適合していて、書式・分量等が守られていること。
 - (3) 掲載料を期日(2017年11月8日)までに納入していること。
 - (4) 作品の図版や写真・VIDEO映像等の著作物を利用する場合および写真等の肖像権は、投稿者が必ず事前に著作権者・出版社・所有者・本人もしくは保護者等の許諾を得ること。
 - (5) 参考文献には、脚注または本文中に発行所・出版年・該当頁等の出典を明記すること。
- 論文査読： A群(理論・実践研究論文)・B群(実践研究報告等)・C群(研究ノート)ともに複数の査読委員が査読を行い、編集委員会での審議を経て投稿原稿掲載の可否を決定します。掲載が決定した論文は、各主査がまとめて論評し、各論評を研究論集の〈論評の部〉に掲載します。
- 原稿書式： A群・B群・C群ともに、本文および図版(写真・表・図等)等、英文サマリー(A群のみ)を含め、下記の文字数を守って下さい。
- 1頁分は、A 4横組2段 23字×44行×2段=2024字です。
- 第1頁のみ第1行目から第6行目(2段取り)までに、題目(副題)・所属・氏名を記載し、本文との間に2行(2段取り)のスペースを空け、本文は、10行目から書き始めます。なお、題目の英語表記ならびに所属・氏名のローマ字表記もこれに含めます。
- 共通の項立て・見出しを用い、以下の番号と見出し語のみとします。
- 大項目 1. 2. 3. [全角数字]…、中項目 (1) (2) (3) …、小項目 ①②③…。
- 掲載要項： A群・B群・C群ともに原則として8頁(C群のみ6頁も可)とし、掲載料は一般(給与を得ている内地留学生等を含む)15,000円、院生・学生8,000円です。
- 2頁増ごとに6,000円を加算し、10頁では一般21,000円、院生・学生14,000円です。
- 増頁の上限は12頁で、一般27,000円、院生・学生20,000円です。
- 原稿は、①ワープロ等で印字し、②データを保存したCD-R等を合わせて提出すること。
- CD-R等の未提出の場合は、一般・学生とも加工料込み30,000円です。
- カラーページは1頁につき12,500円を加算します。
- 抜き刷り(一律50部)は、8頁モノクロで7,000円です。2頁増ごとに2,000円を加算します。(抜き刷りのカラーページは、1頁ごとに2,000円を加算します。)
- 掲載料は投函以前に納入し、送金の証明書(利用明細書のコピー等)を同封して下さい。
- 口座記号番号：00170-1- 86036 (右寄せで記入) 郵便振込です。
- 加入者名：公益社団法人日本美術教育連合
- ご依頼人：(〒)おところ・おなまえ・電話番号・所属
- 通 信 欄：例 掲載料15,000円(一般、8頁)+増頁分6,000円(2頁増の場合)=21,000円(計10頁)
- 抜き刷りを希望の場合は、その旨明記し、必要な金額を加算してください。
- ※査読の結果、掲載に至らない場合は10,000円(院生・学生は5,000円)のみ返金となります。抜き刷りの料金については、全額返金します。

〈投稿原稿〉11/ 8 (水) 必着

- 投稿メ切： 2017(平成29)年11月8日(水)必着。A群・B群・C群とも、①正1部と副4部(コピー可)計5部、②原稿CD-R等、③投稿エントリーシート、④送金証明書(エントリーシートに貼付)を提出して下さい。
- 投稿原稿は、完全原稿とし、締め切り期日以降の差し替え・変更は認めません。
- ただし、研究論集編集委員会が修正を求めるときは、この限りではありません。
- なお、発行日は2018(平成30)年3月31日を予定しています。
- 送付先： 〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1
東京家政大学 家政学部 児童教育学科 結城孝雄 宛

連絡・問合せ先

- 詳細連絡： 研究発表会当日に詳細を連絡します。口頭発表者は時程と場所を最終案内で確認して下さい。
- 問 合 先： 研究論集編集委員長 小林貴史:042-637-8111(代) ktakashi@zokei.ac.jp(東京造形大学)

第51回 日本美術教育研究発表会2017

研究発表概要集

公益社団法人 日本美術教育連合

理事長
(国際局長) 大坪 圭輔

理事・研究局長
研究局運営委員 山口 喜雄
天形 健

小林 貴史
新関 伸也
山田 一美
研究局員 立川 泰史
藤井 康子

理事・事業局長 水島 尚喜
理事・事務局長 結城 孝雄
理事・事務局長代行 西村 德行
監事 宮坂 元裕
北澤 俊之

表紙デザイン 茂木 一司
英訳協力 竹谷摩維子

発行日 2017(平成29)年10月15日
所 在 〒113-0033
東京都文京区本郷2-30-14
文京ビル206号

連絡先 takaoyuki@tokyo-kasei.ac.jp
(結城 孝雄)

The 51st Conference of InSEA in Japan 2017

Conference Outline booklet

Public Interest Incorporated Association
International Society for Education through Art in Japan

Director,
International Chief of the Bureau Keisuke Ohtsubo

Director and Study Chief of the Bureau Nobuo Yamaguchi
Study Station Administration Committee Ken Amagata

Takashi Kobayashi
Shin-ya Niizeki
Kazumi Yamada
Study Officials Yasushi Tachikawa
Yasuko Fujii

Director, Business Chief of the Bureau Naoki Mizushima
Director, Secretary General Takao Yuki
Director, Under Secretary General Tokuyuki Nishimura
Auditor Motohiro Miyasaka
Toshiyuki Kitazawa

Cover design Kazushi Mogi
English translation cooperation Maiko Taketani

Issue date October 15, 2017
Address Bunkyo building 206,
2-30-14 Hongo, Bunkyo-ku,
Tokyo, 113-0033, JAPAN
Email address takaoyuki@tokyo-kasei.ac.jp
(Takao Yuki)

第51回 日本美術教育研究発表会 2017

2017(平成29)年10月15日(日) 会場 東京家政大学16号館
主催 公益社団法人日本美術教育連合 後援 文部科学省(申請中)

9:30 9:45 9:55 (移動)	受付(当日、会場案内を1階に掲示します) 開会式(発表会場 A 161A室/研究発表者控室 162A室 2階) 発表会場 A と B と C は1階、D と E は2階				
	発表会場 A 161A室 (制度・海外など) 定員116名	発表会場 B 161B室 (美術教育実践など) 定員165名	発表会場 C 161C室 (鑑賞教育など) 定員165名	発表会場 D 162B室 (保育・発達など) 定員165名	発表会場 E 162C室 (多様性など) 定員165名
10:00 10:25 (移動)	STEAM教育にみる異領域同士の融合原理(Ⅰ)―関連文献から考察する“Art”の位置付け― 東京家政大学・東京学芸大学大学院博士課程 畑山未央 A1	児童の主体性を引き出す図画工作授業実践の研究(Ⅱ)―中学年の表現活動について― 沖縄カトリック小学校 矢澤 聡 B1	特別支援学級における表現の喜びを育てる版画指導 一般社団法人日本版画院 中條秀憲 C1	幼児の体験と表現 和光鶴川幼稚園 堀 新菜 D1	テキストから豊かに紡ぎだされる視覚イメージの考察―国語教科書の物語文『ごんぎつね』を描く視点― 東京学芸大学大学院博士課程 松井素子 E1
10:30 10:55 (移動)	日本の国際協力における基礎教育分野の一考察 ―造形美術教育の技術移転に関する質的分析― 東京学芸大学附属竹早中学校 山田 猛 A2	中学校美術科の授業におけるコミュニケーションロボット活用の可能性 群馬大学大学院・みどり市立笠懸南中学校 茂木克浩 B2	「共視論」的考察を参考にした図画工作科教育論 お茶の水女子大学附属小学校 堀井武彦 C2	大人が描く子どもの絵―園での造形活動や園児の時間にかすための実践活動― 川口短期大学 木谷安憲 D2	子どもの「とらえ直し」についての研究 ―ユーモアの発現に着目して― 東洋大学 北澤俊之 E2
11:00 11:25 (移動)	美術教育における汎用的資質・能力の育成に関する一考察 ―省察的学習の事例から― 東京学芸大学附属小金井小学校 守屋 建 A3	〔モジュール発表〕 文化多様性の理解を目的とした色彩構成ワークショップの開発 東京福祉大学短期大学部 手塚千尋 東京学芸大学 笠原広一 広島大学 池田史志 千葉大学 佐藤真帆 群馬大学 茂木一司 B4	視覚障害のある高校生の彫刻鑑賞における対話的支援の役割 明治学院大学非常勤 半田こづえ C3	肢体不自由特別支援学校の美術科指導における目標設定の方法に関する実践研究Ⅰ ―実践に対するSTの認識に着目して― 筑波大学大学院 森田 亮 D3	創造主義を支えるシステムの顕在化Ⅱ ―美術教育における大正新教育との邂逅と乖離― 東京造形大学 小林貴史 E3
11:30 11:55	21世紀美術科教育教員養成の研究(Ⅰ) ―松原郁二・倉田三郎・熊本高工の美術教育論― 元宇都宮大学 山口喜雄 A4	東京福祉大学短期大学部 手塚千尋 東京学芸大学 笠原広一 池田史志 千葉大学 佐藤真帆 群馬大学 茂木一司 B4	教育から見た「ソーシャル・エンゲイジド・アート」の実践と分析 東京家政大学 結城孝雄 東京家政大学 畑山未央 C4	小学校高学年における鑑賞活動カリキュラムの研究 府中市立若松小学校 大杉 健 D4	表現活動としての掃除を通じた価値観の転換 ―「モウソウジ」プロジェクトをもとに― 群馬大学大学院 高木路子 E4
12:00 12:10	研究発表者(全員)への諸連絡 昼食・休憩(11:55～/65分) ※当日、近隣には昼食を購入する店はありません。また、学食も利用できませんので昼食は持参してください。				
13:00 13:25 (移動)	1950-70年代のアメリカにおける美術教育評価論に関する一考察 元筑波大学大学院博士課程 佐藤絵里子 A5	ワークショップにおける関係性に関する実践研究Ⅱ―「場・人・モノ」の関係性に着目したプログラム開発のための仮説モデルの構築― 横浜国立大学大学院研究生 前沢知子 B5	図画工作科における創造活動を通じた「造形的な視点」の研究Ⅱ―「悪い」と「イメージ」の関係について― 東京学芸大学 西村徳行 C5	保育士及び幼稚園・小学校教員養成系学部におけるデザイン思考を活用した学びの研究 東京成徳大学 直井 崇 D5	廃材を用いた環境教育 東京家政大学4年 高橋 遥 E5
13:30 13:55 (移動)	中学校美術科と国語科の教科融合型学習の研究 ―地域の銘物から顔料を作り、色名を考える事例から― 大分大学 藤井康子 大分県立美術館 木村典之 津久見市立第一中学校 永松芳恵 A6	絵画の共同制作における場の作り方 館林市立第一小学校 藤原秀博 B6	ソーシャル・プラクティスによる学びの共有と「私たち感」の育成 横浜国立大学大学院 細野泰久 C6	保育者養成における粘土制作体験の教育的意義に関する一考察 ―授業観察とアンケート調査に基づいて― 湘北短期大学非常勤 三上 慧 D6	子どもの美的体験における比喩的イメージの活用と課題Ⅵ ―メタファー画像によるイメージの生成と操作― 東京家政学院大学 立川泰史 E6
14:00 14:25 (移動)	秋田 & フィンランドの「視覚美術・工芸」教育交流展の実践報告(Ⅰ) 大仙市立西仙北中学校 田中真二郎 秋田県立西目高等学校 黒木 健 秋田公立美術大学 尾澤 勇 A7	地域の伝統文化を学ぶ教材のあり方を探る ―夢獅子を題材とした経験的な学習を中心― 熊本大学 赤木恭子 B7	地域のアートモニュメント(パブリックアート)を活用した鑑賞題材の作成と実践-Webサイト『場・アートクルーズ』を通して- 堺市立東原西中学校 田中圭一 C7	幼小中連携から見えてくること-横浜公立小中学校図工・美術実践現場からの報告- 横浜市長が丘中学校 金阿彌勉 横浜市立二つ橋小学校 松本有加 横浜市立西寺尾小学校 笠本健太 D7	日本美術教育連合「山形文庫」の持続的な活用と美術教育研究の発展を目指して 筑波大学 箕輪佳奈恵 筑波大学 直江俊雄 E7
14:30	休憩(14:25～/15分)				
14:40 15:05 (移動)	アイスランドとCity and Country Schoolの交流 東京学芸大学大学院博士課程 伊東一誉 A8	現象学的視点からの造形活動分析による学習者の学びの理解を旨として 神戸市外国語大学大学院・神戸市立港島学園小学校 小田恵子 B8	朝鑑賞の取り組みと成果報告 武蔵野美術大学 三澤一実 C8	英語活動を取り入れた図画工作科の授業開発-美術作品の鑑賞を生かした表現の試み- 福岡教育大学非常勤樋口和美 大分大学 藤井康子 D8	子供が自分らしさに気付く図画工作科の授業づくり 岡山大学教育学部附属小学校 高橋英理子 E8
15:10 15:35 (移動)	社会と関わる美術教育のあり方-教師教育における再概念化- 韓国春川教育大学 柳 芝英 A9	ESDの視点からみた造形教育の実践 ―東日本大震災で被災した宮野森小学校の場合― 東松島市立宮野森小学校 宮崎敏明 B9	地域に根差した美術教育運動 國學院大学栃木短期大学 名取初穂 一般社団法人真岡青年会議所 伊澤 学 C9	知的障害児のコミュニケーション能力を促す造形授業の一考察 筑波大学附属大塚特別支援学校・筑波大学大学院博士課程 森 芸恵 D9	発想や構想の能力と資質・能力論 東京学芸大学 山田一美 E9
15:40 16:05 (移動)	国際美術教育学会誌に見る研究動向 筑波大学 直江俊雄 A10	教員養成課程の図画工作における対話型造形活動についての一考察 目白大学 佐藤仁美 B10	「アクティブ・ラーニング」を取り入れた造形活動における資質・能力の把握と課題 ―小学校「ものづくり部」における「深い学び」に関する考察― 東京藝術大学大学院博士課程 C10 中村 儒雄	幼児教育における描画活動の環境設定と意義 東京家政大学4年 鈴木紗都子 D10	ジェネリック・スキル獲得を目指したアクティブ・ラーニングによる版画教育実践 帝京大学短期大学 大貫真寿美 帝京大学短期大学 三好昭子 秋草学園短期大学 三好 力 E10
16:10	閉会式(10分間 発表会場 A ～16:20)				
16:30 18:20	第51回日本美術教育研究発表会懇親会・集合写真撮影〔東京家政大学16号館1階カフェラウンジ「ルーチェ」〕 ※当日、午前中に受付で申込、一般2500円、院生・学生2000円(ワイン・清酒・洋酒のもちよりを歓迎します)昨年度63名参加				